

高められるか？ 都大の価値を

◎対談：これからの大学と街のかかわり



宮原 秀夫

●大阪大学名誉教授
一般財団法人アジア太平洋研究所所長
一般社団法人ナレッジキャピタル代表理事

池内 啓三

●理事長

グローバルな人材の育成、新たな価値の創造、地方活性化が課題とされる今、地域において大学が果たす役割への期待が以前にも増して高まっている。大学は立地する地域とどのような関係性を結んでいけばよいのか。大阪の街に育てられた関西大学は、大阪の活性化にどのような役割を果たすことができるか。大阪大学の元総長で、大阪都心に画期的な「知的創造拠点」を繰り広げたナレッジキャピタルの代表理事でもある宮原秀夫氏と池内啓三理事長が語り合った。

◆関西大学と街、立地の変遷とその関係

池内 関西大学は1886年、大阪西区京町堀の願宗寺で西日本初の法律学校である関西法律学校として開校しました。その後何度か移転し、大学令により関西大学として認可された1922年には、大阪府三島郡千里村(当時)に千里山学舎を設置しました。また、1929年には天六学舎を新設し、専門部や関西甲種商業学校などを移転しました。ここから、天六、千里山の時代が長く続きました。

千里山キャンパスの歴史は、既に90年以上になりますから、「吹田の関大」は、もうすっかり定着したと思っています。私も本学の事務職員を長く務め、総務局に在籍していた時には、千里山キャンパスの近隣自治会とどのように関係性を築いていくかということに試行錯誤してきました。

天六学舎では長らく夜間教育を行っていましたが、1994年に第2部(夜間部)を千里山に移転しました。その後、天六学舎で

は社会人向け講座を開講するなど、20年間さまざまな事業を展開しましたが、なかなか有効活用ができませんでした。今回、民間企業に売却し、大阪市北区の鶴野町に同社が建設する建物を購入して、来年、新たな教育研究拠点を開設することになりました。ここでは、18歳から20代前半の若者だけでなく、幅広い年代の社会人を対象にした学び直しの場を提供していくと計画しています。

宮原 大学の使命の中に社会人を教育することもあるとすれば、社会人が通いやすい街の中に拠点を置くというのは必然だろうと思います。

私が総長を務めた大阪大学の場合は、以前は工学部が大阪市京橋近くにあり、医学部、理学部が中之島にありました。ところが、工場等制限法という法律が1960年前後にできたこともあって、大阪市内から郊外の豊中や吹田のキャンパスに移転を進め、1993年に完全に集約されました。2007年には大阪外国語大学と統合したのを機に、箕面キャンパスが誕生しました。

以前は国も大阪市も「多くの学生が集まる大学は、都市の過

密を助長するので、都心に集中しないように」という感じの時代があったということです。それが、今になって、「街に元気がないのは、若者がいないからだ」という声が産業界や行政からも上がるようになりました。皆がやっとそのことに気が付いたと言えるでしょう。

池内 吹田市は本学の他、大阪大学、大阪学院大学、千里金蘭大学、大和大学の5つの大学があります。住民の多くは大阪市内などへ働きに出て行きますが、その一方で、吹田市に通学する学生が多く、昼間人口と夜間人口が変わりません。昼間の経済活動も活発で、市内に及ぼす経済波及効果は高いと聞いています。

また堺キャンパスでは、人間健康学部の学生が地域の祭りなどのイベントに、できる限り参加するようにしています。大阪市の住吉大社から地元の方が担ぐ御輿行列が、堺の宿院頓宮まで渡る神事があります。大和川では水の中を練り歩くのですが、この神事に本学の学生が参加して、地域の方に大変喜ばれています。大学生の存在が地域の経済や文化を活気付けるのは間違いのないことです。

■対談

大阪で生まれ、育まれてきた大学として、大阪文化の検証と次世代への継承のため、総合科学の観点から、大阪研究の発展に貢献していきます。



池内 啓三 (いけうち けいぞう)
1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事、法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年理事長に就任。

◆大学の存在が都市格を高める

宮原 「都市格」という言葉があります。ある人が「都市格は、その街にどんな大学、オーケストラ、プロ野球団があるかで分かる」と言っていました。ボストンであれば、ハーバード大学、メジャーリーグのレッドソックス、ボストン交響楽団というように、世界の優勢な都市は、その3つをすぐに思い浮かべることができます。都市には優れた教育機関があるべきです。

池内 おっしゃるように、大阪市ほどの都市に総合大学がないという現状はちょっと考え直さなければならないと思います。

宮原 しかし、数万人の学生が通う総合大学を、都心にいきなり持つてくるというのは物理的に無理です。そこで、複数の大学から学部や学科を都心に集めて、連携大学・大学院を開設してはどうかと、以前から私は提案しています。連携大学・大学院は、いろいろな大学の先生の講義を聴くことができ、そこで取得した単位は卒業単位として認められます。学際、融合分野という言葉が盛んに使われる現代の学問の世界で、広がり続ける学問領域を隈無くカバーするような幅広い専門の研究者を1つの大学が抱えることは不可能です。この分野のエキスパートは関西大学にいるが、こっちは分野は大阪大学で教えているという状況が当たり前になっています。そうすると、阪大の学生が、関大の先生の講義も聴きたいということが当然起こってきます。

地域コンソーシアムという連携の形もありますが、都心に連携大学・大学院があれば、都市格を高めることは間違いありません。

◆大学間の連携で、学生の流動性を高める

池内 日本では学部、修士、博士と同じ大学で学ぶ方が一般的で、人間関係も固定されてしまいます。それによる弊害を解消することにもつながるかもしれません。

宮原 そうですね。外国の先生は「日本の大学は純粋培養だ」と言い、それが、大学が活性化しない大きな原因だと見ています。私もそうだと思います。都心に連携大学・大学院を持って来られれば、学生だけでなく社会人を含めて新しい交流関係を広げることができるでしょう。学生の流動性も高まるのが期待できます。

池内 大学間の連携では、阪大や本学を含め、大阪府内及びその周辺の大学で構成されている大学コンソーシアム大阪や、大学コンソーシアム京都があります。大学コンソーシアム京都では、JR京都駅のすぐ横に京都市が建物を設置し、運営を大学に移管しているのが特徴です。

宮原 建物を建てたら、投資に見合う見返りはあるのかと金儲けで考えたら上手くいきません。すぐに投資の回収ができるわけがありません。学生が集まり、教育を受け、知識や技術を得た後に、地域の企業に就職して社会に貢献する。そういう投資とリターンのサイクルがあること、またそれは一朝一夕ではできないことの理解が求められるでしょう。

そして、大学間の連携は国内だけでなく、世界各地の大学とも進めるべきです。EUは世界中の大学・大学院間の留学を促進する、エラスムス・ムンドゥスやエラスムス・プラスといったプロジェクトを推進しています。既に、日本でもこのプロジェクトへの参加を打診され、動き出している大学もあります。このようなプロジェクトに参加できれば、学生は学問を学ぶだけでなく、語学力を高め、国際的な人間関係を広めることができるでしょう。

池内 大阪で連携大学・大学院を開設するならば、やはり「うめきた」が適切だとお考えですか？

宮原 うめきたは絶好の場所です。広い土地がありますし、2期開発の事業構想はこれからまとめられる段階です。うめきた地区には、明治から大正時代にかけて、府立梅田高等女学校(現・大手前高等学校)、市立大阪工業学校(現・都島工業高等学校)などがありました。この歴史を知る人は少ないですが、元々、文教の地だったわけです。街づくりにおいては、その土地の歴史を尊重することが求められると私は考えますが、うめきた地区にナレッジキャピタルのような知の拠点や文化教育の拠点をつくることは、歴史を踏まえれば自然なことだと思いませんか。

◆大阪都心に「情けに報いる」交流の場を

池内 うめきた地区の1期事業で、宮原先生が中心となって推進されたナレッジキャピタルは、新しい地域活性化の成功事例として海外からも大変注目されていますね。

宮原 香港、タイ、イタリア、フランスなどから同じような施設をつくりたいとご相談をいただいています。イタリアでは、地方紙の1面にナレッジキャピタル総合プロデューサーの野村卓也さんのインタビューが掲載されました。野村さんは関大の卒業生でした。

現代人の消費行動は、これまでのように物を買って消費するというものから、ナレッジ=知を習得し、生活を楽しむという志向に変わってきていると思います。グランフロント大阪は飲食店や商業施設だけでなく、ナレッジキャピタルがあることが多くの人を引きつける魅力になっていると私は思っています。

ナレッジキャピタルには会員制の「ナレッジサロン」があります。年会費は10万円で、決して安いとは言えないでしょう。当初、3年で会員1000人を超えればいだろうと言っていたのですが、2年もたたないうちに2000人を超え、今は入会の順番待ちが出ています。ある中小企業経営者の会員の方は、「サロンに行くと、若い人もいるし、気分が若返って、私自身が賢くなったような気がする」とおっしゃっていました。そういう満足感に10万円を払う人もいるということです。

池内 関西大学もナレッジキャピタルに「うめきたラボラトリ」を開設し、産学連携の成果も生まれています。やはり、コラボレーションは顔を合わせて、挨拶を交わし、相手の表情を見るコミュニケーションから始まるものだと思います。

宮原 私の専門は情報ネットワークですが、情報システムや通信システムによって、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが減るのではなく、更に増やすようなシステムを作らねばならないと申し上げています。インターネットを使えば、済ませられることは多くなったかもしれない。しかし、ナレッジサロンがあればにぎわっているのは、いろいろな人に面と向かっての話ができることに他では得られない価値があるからでしょう。

私の3代前の大阪大学総長だった熊谷信昭先生もよくおっしゃっていました。「情報通信は、情けに報い、信に通じる」と。Informationを「情報」と訳したのは、一説には森鷗外と言われていますが、素晴らしい訳だと思います。電子的なやりとりだけでは、情けに報いることはできないということです。

◆大阪に息づく懐徳堂、泊園書院の伝統

池内 現在、30校を超える大学が梅田近辺にサテライトキャンパスを設置しています。大学の都心回帰の動きは顕著になってきているのではないのでしょうか。

宮原 私が大阪大学総長だったころ、天神祭に関大と阪大と一緒に船を出したことがありました。その時に、大川の橋の上から「お帰みなさい！」と声を掛けてくださる市民の方がおられました。大阪都心に大学が出てきてほしいという要望は強いと感じたのを思い出します。

池内 大阪は江戸時代から人材育成を重視し、先進的な教育を提供する文化が開いた街ですね。

宮原 ご存じのように、江戸時代、大坂の5人の豪商がお金を出して、懐徳堂を北浜に設立しました。学主には三宅石庵という学者を呼び、町人の子供たちに、経営や会計を教えるのではなく、朱子学を教えました。授業料も払えなければ、「紙一枚、筆一対」で善しとされました。懐徳堂が開設されたのは、1724年。この頃は大坂の経済が沈んでいた時期でしたが、そんな時にどうしたら儲かるかではなく、哲学を説いたというのは大変なことです。昔の大坂商人はそれだけ人材育成の哲学を持っていました。今の時代にこそ、こういう私塾を創設した先達のよ

関西大学が大阪の都市格を高める重要な要素の一つであることも意識していただきたいと思っています。



宮原 秀夫 (みやはら ひでお)
1943年生まれ。大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。京都大学工学部助手、大阪大学基礎工学部助教授、教授を経て、大阪大学大学院情報科学研究科長などを歴任。2003～07年大阪大学総長。独立行政法人情報通信研究機構理事長を経て、現在、一般財団法人アジア太平洋研究所所長、一般社団法人ナレッジキャピタル代表理事、大阪大学大学院情報科学研究科将来ネットワーク共同研究講座特任教授、一般社団法人臨床医情報学コンソーシアム関西会長などを務める。

うな価値観が貴重だと思います。

池内 江戸時代後期には、藤澤東咳が開いた漢学塾である泊園書院もありました。その膨大な蔵書、書画などは、本学の図書館が寄贈を受け収蔵しています。東咳の孫、藤澤黄坡(章次郎)とその義弟の石濱純太郎は本学で教鞭を執りました。本学は元々法律学校でしたが、我が国固有の文学が開いた大阪で思想や歴史といった教養を学ぶ大学がないのはいかがなものか、との思いから、後に開設した漢文専攻科や文学部史学科で黄坡や石濱が教授となり、あまたの優れた学者が輩出しました。懐徳堂も泊園書院も藩校ではなく、私塾であり、大阪の学問は近代になっても官より民が中心であったことは、特徴的です。

宮原 受験生の人気の高さから分かる通り、関西大学のブランド力は非常に高くなってきていると感じています。関西大学にはぜひ、この勢いを維持していただきたい。そして、関西大学が大阪の都市格を高める重要な要素の一つであることも意識していただきたいと思っています。

池内 やはり大阪にあってこそその関西大学だと思っていますから、まずは来年、梅田キャンパスを開設することで、大阪市内にもしっかりとした拠点を設けていきたいと考えています。また、本学が来年迎える創立130周年記念事業の一つとして、「関西大学にわ大阪研究センター」を設立します。大阪で生まれ、育まれてきた大学として、大阪文化の検証と次世代への継承のため、人文、社会、情報、防災、理工学などを統合した総合科学の観点から、大阪研究の発展に貢献していきます。